

建築施工の入門本を発刊

養育・販売 豊富なイラストで仕組み解説 日建連

日本建設業連合会(山内隆司会長)の建築生産委員会(委員長・高田守弘、鴻池組社長)は、建築系の学生やゼネコンの若手社員向けに、建築施工の仕組み、サブコンや専門工事業者といった現場従事者の役割などを解説するテキスト「施工がわかるイラスト建築生産入門」を発刊し、11月1日から発売する。文字の多かった従来のテキストと違い、800点

を超えるイラストを使用し、理解しやすい建築施工や建築生産を分かりやすくしている。定価は3200円(税別)、A4判サイズ。全国の書店および影印社で販売している。同書は、建築を学ぶ学生だけでなく、ゼネコンの若手社員、技能者の入職促進を目的に発行した。構成は▽建築生産のしくみ(Part1)▽着工から竣工まで(Part2)▽維持・保全・改修工事(Part3)▽解体工事(Part4)―と関連キーワード



建築は技術の結晶。そして、技術は人がつくる。

ードなどを含む計208ページとなっている。

架空の建設会社「日八建設」の社員が成長していく様子を軸にストーリー展開し、超高層建築物を施工する過程や維持管理、解体に至るまでの技術と、ゼネコンおよびサブコン、専門工事業者それぞれ役割をイラストや図で表現している。品質管理の重要性から企業が負うべき社会的責任(CSR)のあり方、建築工事に不可欠な設備工事や仕上げ工事の内容も充実させることで、幅広い知識を持った技術者を育成する狙いもある。発行にあたっては、同委員会施工部会(部会長・木谷宗一、竹中工務店生産本部専門役)にワーキンググループ(WG)を設置。三原省ものづくり大

学教授の協力を得て編集を行った。WGには大林組、鹿島、鴻池組、清水建設、大成建設、竹中工務店、戸田建設、フジタの8社が参画し、14年11月から複数回の会合を経て、17年7月に完成した。木谷部会長は「イラストを充実させることで、現場の魅力を分かりやすく発信したかった」と編集意図を説明。実際に経験した現場のエピソードや豆知識、トピックを掲載するなど従来本との差別化を図った「これまでにない新しい建築生産の本」であることをアピールしている。リアルさを追求したイラストは、川崎一雄氏(川崎パース工房)が担当している。発行部数は6500部だが、増刷も視野に入れているという。